

ホトトギスとウグイス

立夏の頃に訪れて鳴くホトトギスは、夏の到来、田植えの時期を告げる鳥として古くから愛好され、人々は競ってその初音を聞こうとした。しかしその一方で、ホトトギスはまた「冥土の鳥」、「タマムカエドリ」などとも呼ばれ、あの世とこの世を往来する鳥、死者の便りをもたらす鳥と見なされてもいる。例えば次のような歌は、そうしたホトトギスの一面をよく表している。

しての山こえてきつらむ時鳥こひしき人のうへかた
らなん 伊勢集
いくばくの田をつくればかほとゝぎすしでのたおさ
をあさなあさなよぶ 古今集

古川のり子

このようなホトトギスの暗いイメージは、この鳥が日中だけでなく夜鳴く鳥であることと関連していると思われる。またホトトギスは、その出現の時期に重なるいくつかの植物とも密接に結びついており、卯の花・橘・菖蒲草・藤とともに歌に詠まれることが多い。なかでも橘は、常世の国からもたらされたとされる植物であり、この点でホトトギスがやはり他界と往き来する鳥であることと共通している。万葉集には、この橘と菖蒲草を五月の節句の時に玉に貫いてカズラにする習慣があったことが、たとえば次の様に歌われている。

つのさはふ 磐余の道を 朝さらず 行きけむ人の
思ひつつ 通ひけまきは ほととぎす 鳴く五月に
は 菖蒲草 花橘を 玉に貫き かずらにせむと…

ホトトギスの鳴く五月の節句の時期は、田植えの直前であるとともに、山芋の収穫の時期でもある。山芋は秋の他に、旧四月の下旬から五月上旬にかけても収穫され、五月の節句の食膳に必ず供されるが、節句以後になると堅くて食べられなくなってしまうという(注一)。ホトトギスの出現は、山芋の収穫期の到来と重なるため、ホトトギスを山芋の収穫期を告げる鳥、あるいは山芋と密接な関係をもつ鳥とする考えは、全国各地に見られる。たとえば「ホトトギスが鳴くとヤマイモが芽を出す」(新潟・鳥取)、「五月五日にヤマイモとタケノコを食べないとタンタンタケジョ(ホトトギス)になる」(熊本)、「ホトトギスの初音を芋畑で聞くと福が来る」(宮城・広島)などという(注二)。また青森から鹿児島まで広い分布をもつ昔話に、ホトトギスと山芋の結びつきをはつきり示す「ホトトギスと兄弟」と呼ばれる話がある。それは次のような話である。

昔、その兄と弟とあったんだって。ほた兄と弟と二人あってね、ほいで、その兄は、盲で目が見えなかったんだって。弟は目が見えたんだって。そしてその兄、目が見えねえので、弟はいつでも毎日毎日、その芋掘ってきてくれたって。山から芋掘って

来て、自分で青そのとこばっか食ってて、ほて、目の見えねえ兄に、いいとこばっか食わせたんだって。そしたら、そのいいとこくれていんでも、その兄は信用しねえで、俺にこんだうめいいとこくれるんだもの、自分でどんだけいいとこ食ってるんだと思って、あの疑りかけて。ほうして、「お前、俺にこんないいとこ食わせてんだの、お前なんかもつといいとこ食ってんだ」つたら、「そうだねえ、俺まずいとこ食うんだ」って。でも、その兄聞かねえだって、「俺にお前まずいとこくれる」って。そして兄、「そんなこと言うんだつたら、そしや、お前は俺殺してみる」って、その目の見えない兄、弟をば殺して、腹裂いてみたって。腹裂いてみたら、腹の中に青をばっかりだったって、青をばっかり。ほんで自分で、どうしたって生きていらんなくなくて、ほいだ今度死んで、自分で今度鳥になつて、生きてらんねえ、死んで鳥になつて、そいで、その夜さ、四十幾声鳴かんな寝られねえんだって。「弟恋し」って鳴くんだって。

新潟県東頸城郡牧村(注三)
大きな赤い口を開け、夜中まで鳴き続けるホトトギスは、弟の腹を裂いて殺した盲目の兄が化したものだとい

う。弟殺害の原因となつた食物は、圧倒的に多くの話で山芋である。そこでホトトギスは山芋の季節になると現れて、「弟恋し」、「包丁かけたか」、「おと腹突つ切つちよ」、あるいは「弟恋し、薯掘つて食わそ、弟恋し掘つて煮て食わそ」、「弟恋しや芋ほしや」、「明日節句しよ、弟恋し」などと、八万八千声鳴き続けて血を吐くという。

ところでこれと似た話が、菅江真澄の陸奥巡遊の日記（一七八六年）の中に、継兄弟の話として記録されている。

此（の鳥を）こなべやきといへる事は、むかし、男子ふたところもたるひんぐうの君あり、太郎は亡妻の兄（コ）にて次郎は後妻の弟（コ）也。此弟しばし兄の外に出て遊び居るをうかゞひ、なにくれとあなぐれいでて小鍋焼てふ事して物煮を、兄のゆくりなう外より来て、こわ某烹かどさしのぞけば、兄に見せじと、かなたこなたともてわたり、また兄の来たらばいかゞせんと、もの陰にかくろひて、唯一人は人を喰ひにくひて、あな腹くるしとふしまろび、背中裂て、くるひ死たり。其弟が靈魂霍公鳥（ホトトギス）と化て、しか「あつちやとてた、こつちやとてた、ほつとさけた」と叫び鳴ク也。そは其よし

なりといへり。（注四）

やはり兄弟が食物をめぐる争い、継兄に分け与えずに独り占めた欲深い弟（後妻の子が、死んでホトトギスと化した）という。このタイプの話は「ホトトギスと小鍋」と呼ばれ、報告例は少ないが昔話としても伝えられている。ここでは継兄と弟は、継母と継子となつており、ご飯のたくさんはいった小鍋を独占しようとした継母がホトトギスになつたとされる。小鍋をめぐる継母が継子を迫害し、その結果一方が鳥に化したという話はかなり古くから存在していたらしく、平安末期の歌学書である『袋草子』や寂蓮法師の和歌の中に、その断片をうかがうことができる。

薦よなとさは鳴そちやほしきこなへやほしき母や恋しき

コレハマゝハゝノモトニアリケルニ。チキサキツチナヘノアリケルヲ。ワカハラノコニハトラセテ。マゝコニハトラセサリケレハ。ウクヒスノナクヲキキヨメル歌也。 袋草子卷四（注五）

かかりけるみりの花ぞうぐひすよこなべをほしと何おもひけん 寂蓮法師（注六）

ここでは、鳥と化したのは小鍋を隠された継子の方で

あると思われ、その鳥はウグイスとされている。このよ
うな話は、日本に広く語り伝えられている継子いじめの
昔話のひとつ、「継子と鳥」の話によく似ている。それ
は、父親の留守中に継母が継子を迫害して殺し、殺され
た継子がウグイスとなって、あるいはウグイスが鳴いて
父親に真実を告げるといふ話である。この話の結末部で
死んだ継子が月や星になったとされる例がわずかに見ら
れるが、この「継子と鳥」の話とほぼ同じような内容を
もつ継子いじめの昔話に、「お月お星」または「お銀小
銀」と呼ばれる話がある。

先妻の子はお糸、後妻の子は唐糸。父親が大工稼
ぎに行つた留守に、後妻がお糸を箱に入れて山に埋
める算段。姉思いの唐糸がからしの種五合を渡し、
道中箱の穴から落とせという。後妻は埋めた箱の上
に石をのせる。唐糸は遠足といつて偽つて焼き飯を
持つてからしの花をたよりに助けに行く。とんびが
羽ではばたいて、石をどける。二人で町に出て働く。
もどつてきた父親は悲しみのために盲目になり「お
糸とから糸いだらば、この目がばつたらあぐように」
とさかし歩く。二人が声を聞きつけて再会し目が開
く。三人で仇をとろうといい、お糸は天道様、唐糸
は月、父親は星になる。後妻はもぐらもちになり日

に当たると死ぬ。

山形県上市市（注七）

父が旅に出、継母は継子を殺そうとする。お月を
初倉、お星を米倉に入れるが失敗。お月を山に捨て
るがけしの種を落として目印にする。お星は花をた
よりにお月と再会し、山中で二人で暮らす。どこか
で奉公でもしようかと山を下り、村で飯炊きをする。
子供がいなくなると貧乏になり父は死に、継母は盲
目の乞食になつて鉦をたたいて歩きお月お星と再会
し、娘たちの厄介になる。それからお月は月に、お
星は星に、継母は土竜になる。

岩手県東磐井郡（注八）

ここでは子供はウグイスではなく月や星になつたとさ
れているが、継母に迫害された子供が他のものに変身す
るといふ点では、「継子と鳥」の話と同じである。この
話では、特に継母あるいは父親の「盲目」という要素に
注意すべきだと思う。悲しみて盲目となつた父親は
子供たちと再会することで視力を回復するが、継母の方
は最終的にモグラ・座頭になつた——つまり盲目になつ
たという。したがつて「盲目」という特徴は、継母に本
質的なつながりをもつものだと考えられる。継子を迫害
した継母が盲目であることは、「ホトトギスと兄弟」の

話において、弟を迫害した兄（＝ホトトギス）がやはり盲目であったことと共通するものである。

このように「ホトトギスと兄弟」↓「ホトトギスと小鍋」↓「継子と鳥」↓「お月お屋」へと見てくると、これらの昔話は、同じひとつの話のそれぞれ異なる現れとして存在していることがわかる。ここでは、貪欲な殺害者はホトトギスとして、また盲目の兄として、さらにはモグラと化した継母として表現される。他方の憐れな被害者は、無欲な弟であり、継子でもあり、それはまたウグイスや月としても表されるのである。

ところで、ウグイスの登場する昔話に「見るな座敷」がある。

木びきが木を切っているときれいな姉が日傘をさして来る。姉は木びきに響になつてくれという。姉について山奥に行くとりつばな家。だれもない。

水風呂が沸いている。姉は、一月から十二月まで座敷があり、その月の景色があると見せる。十一月まで見せてあと一座敷は見るなどという。見なければ仕事をしなくても食べられ、年もとらない。姉が子供を連れて里に帰ると、留守の間に座敷を開ける。中には誰もいず金の茶釜に茶菓子がある。菓子を食ひ茶を飲んだりして知らぬふりをしている。姉が帰つ

てきて、あの座敷は山の神様の座敷で、見たからここにはいられないという。姉は鶯になり尻尾に子供をつけて飛んで行く。男はにわかには信ぜない。

新潟県西蒲原郡（注九）

吉田敦彦氏は、このウグイスは山の変化した姿のひとつであることを明らかにされた（注十）。そして山の神がウグイスとして表される理由を、山の神が春に里に降りて来て田の神となり、秋にはまた山に帰って山の神になるという、田の神去来の信仰と関連させて次のように説明されている。

わたしたち日本人はこのように、山の神さまがただ山で取れるものだけを、人間のために出して与えてくれるのだと思つてはいなかつたのです。この本当に有り難い神さまは、山からわざわざ人間たちがそこで暮らしている里まで降りて来て、田で取れるお米をはじめとするあらゆる食物や、そのほか糸や布など人々の生活に必要なさまざまなものまで、その働きによつて出してくれるのだと信じられてきたのです。

それだからわたしたち日本人は、山の奥のどこか人がめつたに近づけぬ隠れた場所に、この神さまがそこでお休みになるお座敷があるのだらうと想像し

たのでしよう。そしてそこに行けばとうぜん、お米をはじめこの神さまが人間のためにいつも出してくれている美味しい食べものが、いくらでもでてくるはずだとも考えたのでしよう。

「見るなの座敷」の昔話には、日本人が山の神さまの神秘な力と働きに奇せてきた、このような思いとあこがれが、美しく表現されているのです。そう考えれば、この話に出てくるまるで山の神さまの分身か化身のように思える美女が、正体はじつはウグイスだったと言われているわけも、よくわかるのではないのでしょうか。なぜならウグイスはわが国で、春吉げ鳥と呼ばれて、里に来て鳴くことで春の訪れを知らせると、考えられてきました。だから人々はごく自然にこの鳥を、ちょうどその時期に里に降りて来て田の神になると信じられていた、山の神さまの有り難いお姿と、重ね合わせてみたのでしよう。そしてその神さまのお使いか、分身のように想像したのだと思われます（注十一）。

このような山の神と田の神の交替の信仰をもつわが国では、春のはじめに田の神を迎え、秋の収穫後にその神の一年の田での労苦に感謝して山や天に送り返ししたり、家に招いてもてなしたりする行事がある。その代表的な

ものが奥能登地方のアエノコトだが、ここでは家の主人が田の神を田から家へ迎え、炉の火にあたらせ、風呂に入らせたあと御馳走を出してもてなす。この田の神の特徴について、堀一郎氏は次のように報告している。

田の神は片目の神とも座頭神とも一般に信じられている。それは米粒には稲の芽——これをキビス（踵）と呼んでいる——が一つしかないから片目だといったり、久しく田の中に入っているので眼がくらい、あるいは苗葉で眼をつかれたのだとも説明する。それでこの祭の全体のもてなし方には、眼のわるい神に対する配慮が強く見られる。例えば風呂へ神を案内する場合、「こちらでございませう、こちらへお出で下さい」と、紙燭で足許を照しながら切りにいし、御膳をそなえたあと、その品目を一々口に出して言上するならわしがある。（注十二）

アエノコトの田の神が盲目とも片目とも考えられていることは、日本の山の神が多くやはり片目片足の神と伝えられていることと共通するものがある。また五月の節句に菖蒲草を飾る由来譚でもある「食わず女房」の昔話において、食わず女房の正体は山姥であったとされているが、この食わず女房＝山姥が、やはり菖蒲の葉先で目を突いて盲目になったと語られている。山姥もまた山の

神の妖怪化した姿であることは、吉田氏が詳しく論じておられる(注十三)。このような田の神、山の神、山姥の「盲目」という特徴は、「ホトトギスと兄弟」で弟を殺してホトトギスとなった兄が盲目であったこと、「お月お星」で継子を迫害した継母が盲目になったことを思い起こさせる。特に、食わず女房Ⅱ山姥とホトトギスは、五月の節句の時期に出現する点でも一致している。食わず女房Ⅱ山姥が、頭上の真つ赤な口を開け食物や人間を呑み込もうとする貪欲な姿は、やはり貪欲な兄が、弟の食物を妬んでその腹を裂いて殺し、ホトトギスとなって大きな赤い口を開けて鳴き続ける姿と共通するものをもっている。

ホトトギスの兄の盲目という特徴はこれまで、この話が盲目の話し手によって伝承された痕跡であると解釈されてきているが、むしろこうした山の神の特徴と結びつくものではないかと思われる。春を告げて鳴くウグイスが、春に里に降りて来て田の神になる山の神の化身と見做されていたように、立夏の頃に山から訪れて鳴くホトトギスも、田植えの時期を知らせてくれる田の神とも、山羊の収穫期を告げる山の神の化身とも考えられていたのではないだろうか。

とここでこのように見てくると、対照的な性質をもつ

二種類の鳥——憐れで無欲な被殺害者の化身であるウグイスと、残忍で貪欲な殺害者の化身であるホトトギスとが、昔話の中では山の神を媒介としてひとつに結びついてしまうことになる。吉田氏によれば、昔話や伝説の中で山姥としても表現される山の神は、まったく正反対的な二つの側面をもっているという。ひとつは人を食い殺す恐ろしい妖怪としての側面であり、もうひとつは、きわめて多産で人々に福や富や作物の豊穰をもたらし、死んでなおソバ・アワなどの作物を発生させてくれる、産育と豊穣の女神としての側面である。ともに山の神の化身としての性質をもつホトトギスとウグイスは、山の神のこのような対照的な二つの側面の一方と、それぞれ関係しているのではないかと思われる。ホトトギスは託卵性の鳥で、自分で卵を孵化させず、ウグイスの巣の中に卵を産みつける。このことは古くから知られており、万葉集にも次のように歌われている。

鶯の生卵の中に 霍公鳥 独り生れて 己が父に
似ては鳴かず 己が母に似ては鳴かず……

……木の晩の 四月し立てば 夜隠りに 鳴く霍公
鳥 古ゆ語り継ぎつる 鶯の現し真子かも……

万葉集・一七五五
万葉集・四一六六

つまりウグイスとホトトギスとは、どちらも季節の到来を告げる鳥というだけでなく、親子、もしくは継母と継子の関係という、切り離し難い密接な関係にあるのである。ウグイスの巢の中で、他のウグイスの卵よりも早く孵化するホトトギスは、生まれて数時間もすると他のウグイスの卵や雛を背中にひとつづつおせて放り出して殺し、巢を独占してしまう（注十四）。ホトトギスと化す盲目の兄が弟を殺したように、継兄弟たちをすべて殺してしまうわけである。親のウグイスよりもはるかに大きいホトトギスの雛は、飽くことのない食欲でエサを求め、その大きな赤い口で親の嘴にまでかぶりつくため、ウグイスの嘴の上の毛は痛々しく傷つくという。それでも親のウグイスは、自分の雛をたくさん育てる以上の労力を費やして、一羽のホトトギスの雛を育てるのである。こうしたウグイスの育雛について、たとえば東光治氏は「唯その熱狂的母性愛に啞然たらざるを得ない」と述べておられる（注十五）。このように見てくると、どちらも山の神の化身とされるホトトギスとウグイスは、親子兄弟のような緊密な関係にありながら、ホトトギスが山の神の、残忍に人を食い殺そうとする食欲で恐ろしく醜い側面とより強く結びついているのに対して、我が身を傷つけても子を育てるウグイスは、自分の身を犠牲にし

ても人々のためによいものをもたらす山の神の、無欲で憐れな美しい側面とより強く結びついているということが出来る。そして昔話のなかで山の神のこの二つの側面は、弟を殺した欲深い盲目の兄（＝ホトトギス）と兄のために山芋のよいところをすべて与えたにもかかわらず殺されてしまった健気な弟という一組の兄弟として、あるいは継子を殺してモグラになった残酷な継母と憐れな継子（＝ウグイス）という一組の親子として表されているのだと思われる。（注十六）

注

一 福田晃『昔話の伝播』、弘文堂、一九七六年、一七九頁。

二 鈴木葉三『日本俗信辞典』、一九八二年等参照。福田前掲書、一八一頁。

三 「はしわの若葉」、菅江真澄全集第一巻、未来社一九七一年、三八二～三八三頁。

四 続群書類従第十六輯下、八一五～八一六頁。夫木和歌抄卷第二、春部二。

五 関敬吾、『日本昔話大成』五、角川書店、一九七八年、一四二頁。

六 同書、一五一頁。

七 同書、四、一九七八年、二九三頁。

- 十 吉田敦彦『妖怪と美女の神話学』、名著刊行会、一九八九年、一四〇～一七二頁。
- 十一 吉田敦彦『日本の神話』、青土社、一九九〇年、八三～八五頁。
- 十二 堀一郎「奥能登の農耕儀礼について」、『新嘗の研究』第二輯、吉川弘文館、一九五五年、八〇頁。
- 十三 吉田前掲書（十一）、および『昔話の考古学』、中央公論社、一九九二年等参照。
- 十四 朝日百科『動物たちの地球』二十二、朝日新聞社、一九九一年等参照。
- 十五 東光治『万葉動物考』正編、人文書院、一九三五年、二六四頁。
- 十六 このような山の神の二つの側面は、日本神話の中では山の神の二人の娘「イハナガヒメとコノハナサクヤヒメ」という姉妹として表現されている。